



少女小説
ゆくく水

美知代



「あら、石川さんだわ」

「石川さんが被入つて、よ」

「今しもイギリスの時間が終つて、ガヤガヤ教室を出て来た連中は、控室にしよんばり考へ込んだやうに腰掛けた石川清子に眼をつけました。」

「どうなすつたのお清さん！」

「一番親しい山口愛子が駆け寄つて訊きました。」

「あら……」清子は周章てたやうに顔をあげ、もうイギリスの時間は済みましたして？」

「あなた鐘が聞えなかつたの、は、何をそんなに」

「考へ込んでらつしたのよ、可笑しいわ」

「だつて私……」

「暫らくお見えにならなかつてね、御病氣はやつぱりお風邪？」

「又一人が寄つて来ました。」

「え」清子はほんのり顔を薄赭らめて、小聲に答へるのでした。

「でも、もう御全快でせう。今日もね、イギリスの先生が頻りに氣を揉んで、何故石川さんは四五日も續けて缺席なさるのか、どんな御病氣か、家は何處いらかつてね、根ほり、葉ほりお聞きなさるのよ」

「あら左様？」

「實は私、今日あたり歸途に廻つて、御見舞にあがる積だつたのよ」

山口愛子が云ひますと、清子は急ぎ込んで、

「あら、だつて私轉しましたの」

「まあ何處へ？こんどのお家はどんな家？」

「……」

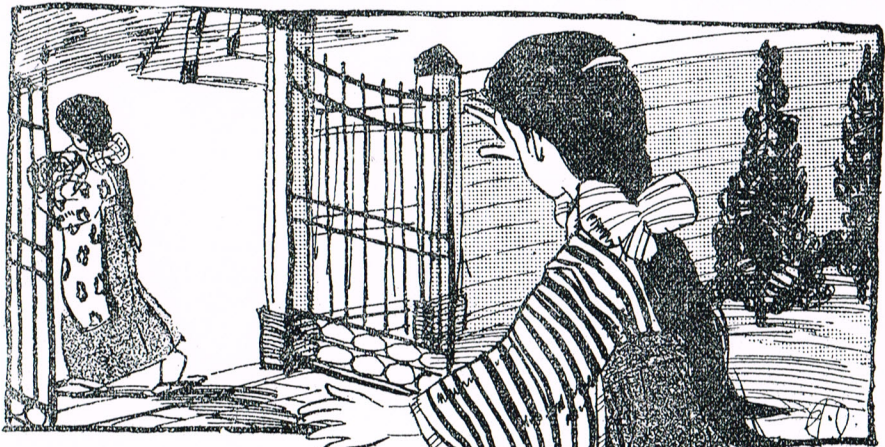
「伏眼に俯向いたその足下へ、涙がはら／＼こぼれて落ちました。」

「どうなすつたの？え、え？」

「愛子は驚いて、靜かに友の脊を撫でました。」

「愛子さん、もうあなたにもお目にかゝれません」

「雨の袂に顔を蔽ひながら、切」



「切に云ひますと、」

「何故、何故、え、何故ですの清子さん」

「思ひがけない事を聞かされて、愛子はちつと友の様子を見守りました。」

「ね、何故そんな事を仰有るのよ、」

「ね、聞かして頂戴その譯を」

「私、今日つきり、學校をよします」

ん」

思ひ切つて云つたのですが、

「嘘、嘘でせう、嘘だわあなた！」

愛子は容易に信じやうとは致しません。

「否、私、皆様においとましたり、お荷物を取纏め

たり、退校届を出したり、全くそのために來ました

の」

思ひ返したやうに涙を拭いて、口元に淋しい微笑をたへながら、

「それでも、先刻校長先生にお目にかつて、お届を差上げましたの」

「まあ、どうして！」

第一に愛子が摺寄ると、級友は呆れたやうに周圍に寄り添ひました。

「：：だつてね、やつぱり家の都合ですよ」

「など、何處かへお變りなのでせう、誰だつて、退校届の文句は、家事の都合により」と、きまつて左様かくものよ、ね、石川さん、今度の學校は何處

ですの？」

誰かこんな事を訊きました。

「あら、學校なんか變る位なら、退校したりしませんわ、ですけども全く家の都合でよさなければなりませんの」

「左様！だけど如何なすつたのでせうねえ」
清子の父様がさる會社の重役で、中野の邸の立派なことなどを知つて居る級友は、どうした譯で、斯う急に退校しなければならぬのか、不思議で堪りません。

「屹度お嫁にいらつしやるのかも知れないわね」

ふと、誰かこんな事を云ふ者もありました。

「まさあか」

十六の清子が嫁ぐために退校とは、受取り難い事のやうにも思はれました。

すると其所へ、清子とは始終、首席を争ひ合つた秋山しげ子がやつて來て、

「オヤ、石川さん、あなたとうく御退校ですつて

ね、だけでもお父様があんな風におなりなんですもの、無理もないわ、私お察してよ」

水の流れる如き流暢な言葉で以て、如何にも同情

したやうに云ひました。

「お父様があんな風におなりなすつたつて、一體どうしたのよ」

皆は齊しく好奇の眼をしげ子の方に向きました。

「あら皆様御存じなかつたの、清子さんのお父様の會社が破産して、家中何處か裏店へお轉しなすつたのですつてさ」

「まあ！」

一同は呆れた顔を見合せました。

「違つたら御免なさいね、清子さん、だけど私、新聞に出て居たから知つたのよ」

丁度この時校鐘が鳴りまして、第二時間目の授業を報じました。

丁度この時校鐘が鳴りまして、第二時間目の授業を報じました。

丁度この時校鐘が鳴りまして、第二時間目の授業を報じました。

丁度この時校鐘が鳴りまして、第二時間目の授業を報じました。

丁度この時校鐘が鳴りまして、第二時間目の授業を報じました。

丁度この時校鐘が鳴りまして、第二時間目の授業を報じました。



「今度はお習字ね」

一同はそれを機會に、清子の傍を離れて、教室へと急ぎました。

「清子さん！」

山口愛子が一人残つて、清子と二人手を執り合つて泣きました。

「愛子さん、後生、私のお座の中のものをみんな持つて来て頂戴な、私もう皆様に顔を見られる勇氣はありませんもの」

「え、え、よござんすとも」

「ではどうぞ、お早く！」

「だつて……」

「だつて、あなただつて早くなさらないと、お習字の先生がいらつしつてお困りなさるぢやありませんか。それに私も早く歸らないと、家の者が心配しますから、どうぞねえ」

愛子は涙を拭いて、つと起ちましたが、やがてメリンズ友禪の風呂敷に包んだお荷物を持ち出しました。

「有り難うよ、ではさよなら、お大事に！」

「門まで送らして頂戴な」

「否、あなたはどうぞ教室へ！」

云ふより早く、清子はお廊下の外へと駆け出しました。

「あら清子さん、清子さんてば一寸と、今度のお家は何處ですの、番地だけ知らせといて頂戴つてば」云ひながら暫らく跡を追ふて駆けましたが、清子は振り返りもしないで、校門を出て行きました。

「愛子さんにだけ云つて置けばよかつた、あとで屹度變に思つていらつしやるわ」

ふと氣がついて見ると、清子はいつもの癖で、甲武線の電車に乗るべく、水道橋停車場の石段をさがりかゝつて居りました。

「あゝさうく、巢鴨の奥へ歸るには斯うではなかつた」

何とも彼とも云へぬほどのわびしい氣になつて、清子はまたとぼくと、市内電車の方へ石段を降りました。

橋を渡つた停留場で待ち合して居る間も、家の事

が氣になつて堪りません。今頃は母様何をなすつてらつしやるだらう？ 又借金取りの人が大勢詰めかけて、云ひ譯に困つてらつしやりはしないかしら、お父様は歸つて来て下すつたらうか、また御酒を飲み歩いて、今晚も家へ歸つては下さないお積りかしら。お母様が氣の毒だ、なんにも知らないで、先の家ばかり戀しがる太郎さんや、美彌ちやんが可哀さうだ……

「動きまあす、チリンチリン」

ほんやり佇つた清子の前を何時の間にか、電車が行き過ぎました。

(つとく)